

■ 戦略経営研究会 139th ミーティング 議事録

日 時：2021年4月3日(土) 14:00-16:30

場 所：オンライン

テーマ：仙台市荒浜地区での新規就農 ～農業を通じた地域コミュニティのデザイン～

発表者：平松希望さん(平松農園 代表)

参加者：13人(財務コンサルタント、大学教員、経営者、会社員、ライター、税理士、NPO法人理事長、行政書士、司法書士等)

目次：

1. 平松農園の紹介
2. 東日本大震災と就農までの経緯
3. 農家と気軽に話す機会をつくる
4. 荒浜型 CSA によるサブスク
5. まとめ

発表：

1. 平松農園の紹介

平松農園は2017年4月創業です。仙台市若林区の荒浜・荒井地区で年間20種類ほどの野菜を生産している個人農家です。圃場は分散しています。合計で1.5ヘクタールあります。ハウスは7棟です。現在、5年目です。28歳です。生産している野菜は仙台市内の八百屋やスーパー、直売所にも卸しています。個人への宅配や飲食店にも販売しています。

2. 東日本大震災と就農までの経緯

富山県滑川市出身です。2011年3月、東北大学に合格しました。母とアパートを決めに仙台に行ったときに東日本大震災に遭いました。2、3日、避難所にいました。仙台の被災を実際に見て、大学に入るか悩みました。ライフラインは戻るのか？ 福島第一原発は大丈夫なのか？ 身の安全を守り生活できるのか？ しかし、東日本大震災の日に仙台にいたのも何かの縁だろうと入学を決めました。大学はゴールデンウィーク明けからでした。5月末から、友だちと一緒に仙台市沿岸部でボランティアを始めました。そこが荒浜地区でした。瓦礫の片付けや屋内の泥出しを行いました。そのボランティアの中で、農家と初めて話す機会を得ました。私は農学部の農業経済学専攻でしたが、大学では農家と話す機会がありませんでした。お話ししてみても、農家の生き方に衝撃を受けました。農家って面白いと感じました。東北大学の農学部卒業生は大手企業や官庁に勤めることが多いのですが、私は農家を目指しました。農家は素晴らしいです。しかし、農業の担い手は減り、衰退しています。応援したいと考えました。農家になって現場で農業を再生したいと考えました。地域産業としての農業の課題として、東日本大震災の被災地は他の地域の10年先を示しています。つながりの消失や衰退が急速に進んでいます。農業政策とコミュニティの現実とのズレを埋めたいと考えました。大学卒業後、研修を2

年行い、就農しました。

3. 農家と気軽に話す機会をつくる

荒浜地区の集団移転跡地の事業候補者に決定しました。荒浜小学校跡地の隣りです。近くには仙台ターミナルビル株式会社が開設した観光農園もあります。悩みました。東日本大震災前を知らない人間が借りて良いのかということです。また、経営が成り立つという自信もありませんでした。新規就農者は5年で3割がやめるというデータもあります。ハードルが高いと感じました。この事業者になるか、本当に迷いました。地元の人は望んでいるのだろうか。震災前は住宅街だったところが農地になります。しかし、地域の方にも悩み含め相談し、決断しました。地域の農業を考える拠点にしたいと考えています。仙台あぐりる農園の小倉さん（上記の大学生ボランティア団体の後輩）や ReRoots、地域の農業者の方たちなどを協力して農村塾を立ち上げる予定です。オープン日（農園公開日）には、誰でも予約なしで野菜を買ったり、見学したりすることができます。気軽に会える農家さんはなかなかいません。農家さんからすればメリットがないからです。しかし、農家さんと気軽に話しをしてみたいというニーズがあります。

平松農園は、1年で10件くらいの視察を受け入れてきました。Twitter や Instagram のフォームから申込みをいただき、1人、1時間ぐらい、お話しを聞いたり圃場を見てもらったりしています。生産や販売などのヒアリングを行います。経営に適した収穫の仕方などをアドバイスします。たとえば、トウモロコシですと、朝とるのが基本とされますが、経営によっては昼に収穫することもできます。が、その場合は必須で保冷庫が必要になることです。売上については、80円のものを買っていただくにはどうするか、原価を下げるにはどうするか。自分が新規就農したとき、完全に素人からでしたし、聞くのがはばかりれたり、どう聞けばいいのかわからないことがありました。当時知りたかったことも踏まえ、できる限りお話ししています。

農業への関心は高いです。新型コロナの影響で新しい生活や仕事を模索する人が増えていきます。大学生も模索しています。その中で、実際に農家になる一歩を踏み出した人は少ないです。農家になるのは難しいと考えて諦めてしまいます。新規就農の本を読むと、農家は儲かると書いてあるものもありますが、それ以前の課題を書いているものは少ないです。たとえば、いかに農地を借りるかです。農地を借りるためにはつながりが必要です。農村塾でつながりを育てることができればと考えています。宮城県には、非農家出身者の農業者ネットワークがあります。非農家出身者同士と、4Hクラブや認定農業者の会と集まる人たちも違いますし、いろいろなネットワークが必要だと思っています。県のネットワークを2年前に立ち上げて、私は理事を務めています。いろいろな世代の農家があります。

今年8月、荒浜地区の集団移転跡地をマリーゴールド畑にします。眺めを楽しむだけではなく、緑肥にもなります。マリーゴールドは虫除けにもなります。マリーゴールドは荒浜地区に元々住んでいた方々にも楽しんでもらえたらと思っています。東日本大震災後の街を見たくな

いという方もいらっしゃいますし、町並みは全て変わってしまっているし、いつまでたっても更地や被災地だといわれている場所でもありますが、荒浜地区って良い場所だねと本来の魅力を伝える一端になればと考えています。

4. 荒浜型 CSA によるサブスク

各地域において、各々の課題を解決し、自律的で持続的な地域社会を目指す取組み、復興庁の「新しい東北」のコンテストに応募しました。「荒浜型 CSA によるサブスク マリーゴールドと農で彩りを！」の内容で、荒浜地区の復興を伝えるにはどうしたらよいか、これまで以上に、地域らしさや地域産業である農業の内容を深めたいと考えました。結果、協賛企業賞として、JR 東日本賞を受賞することができました。

「荒浜型 CSA によるサブスク」の内容を説明します。農産物には①一般流通と②CSA（コミュニティ・サポーターズ・アグリカルチャー）があります。①はモノとカネの交換です。農家と生産者の間に流通業者が入ります。最低限の安全基準が保証されます。②はモノとカネの交換に合わせてコミュニティづくりです。流通業者が入りませんので、農家にはお金がすぐに入ります。また、鮮度も良いです。とはいえ、農家は手間が増えます。「荒浜型 CSA による野菜サブスク」は地場産の野菜を新鮮、低価格で受け取れるだけでなく、地元の農家の応援にもなります。鮮度良く、旬の野菜が欲しい、農家とコミュニケーションをとりたいといったニーズのある方がターゲットになります。

背景としては、東日本大震災により農業のあり方が変わったことにあります。荒浜地区では兼業農家が減少し専業農家が増加しました。また、大規模化が進み、効率的、合理的な農業へと進んでいます。また、農家は内陸部から農地に通うようになっています。一例として、荒浜地区は全戸集団移転の集落となり、もともとあったコミュニティが別々になっています。世襲する仕事として、農業の形はほぼなくなり、このことにより、家族の中で農業を理解できなくなってきました。たとえば、農家の子どもたちであっても目の前で農業を見ることがなくなり、農業がわからなくなってしまう。また、都市部と農村部の心理的距離の遠さへもあります。そこで、テーマを「会いに行ける農村」、「農業の未来をみんなで創る」、「コミュニティと農業の相互作用」としました。仙台市を中心とした消費地と沿岸部農業地域を結ぶネットワークにより、人材の確保、販路の確保など産業や地域維持に向けた可能性を探ります。農業を通し、豊かさを考えたいです。そのためのキーワードは農業生産、新規就農定着支援、食農教育、農福連携、CSA です。

顧客とのつながりとして、まずは先ほどのマリーゴールド畑に来てもらい、見てもらいたいです。また、月1回の農園オープン日にも来てもらいたいです。その場で、野菜サブスクの実験販売を行います。その背景や地域の成り立ちを伝えます。スーパーなど小売店と比較すれば、品揃えは良くないです。農家を選びますので、消費者の好きな商品は選べません。しかし、当日朝どれを中心に鮮度抜群の、まさに旬のものを提供できます。このことは食農教育にもつながります。規格外を使い、低価格を実現します。津波被災地の支援にもなります。また、ご近所や職場による共同購入により運送コストを下げることができます。ご近所による共同購入に

は見守り活動にもなります。日常的につながりがあると災害時に機能します。野菜を媒介として防災コミュニケーションになります。

5. まとめ

今後の展望についてです。長い目線で行います。来年、再来年の成果を目指すのではなく、ゆっくり育てていきます。中期的に、2027年ごろ、農業経営の土台を固め、地域の担い手となることを目指します。売上げに占めるサブスクの割合は売上げの5%とします。この目指す姿の達成に向けて、2027年ごろを目途に認定農業者として地域の中心的担い手となるために徐々に進めます。

「荒浜型 CSA によるサブスク」の価格設定は再生産可能価格から計算しています。特徴は、①旬の野菜、②規格外品（市場出荷にはサイズが合わないもの）もたまに、③試験的野菜もたまに（お試しの。意見を聞くために）となります。新鮮、安価、満足な量でご提供します。野菜セット、荒浜地区や農村の情報発信、農業や農村体験の対価として、年会費とサービスへの意見をいただきます。マリーゴールドを見に行ったら、農業の魅力を知り、学べるようにしたいです。

以上